

文化財センター通信

【かぎぐるま】

# 風車

第 19 号

平成18年1月25日発行



紀州の歴史と文化の風

財団法人 和歌山県文化財センター

## 旧吉備中学校校庭遺跡 発掘調査の概要

### 有田川流域で発見された弥生時代後期の集落

(報告 佐伯和也・川崎雅史)

#### 旧吉備中学校校庭遺跡の周辺

旧吉備中学校校庭遺跡は高野山に源を発する有田川の流域、有田郡有田川町(旧吉備町)下津野に位置します。付近には沖積平野と河岸段丘が発達しており、有田川流域では最も広い平野が広がっています。この平野部を基盤に旧石器時代から中・近世に至る各時期の遺跡が点在しています。これまでの発掘調査で旧石器時代の遺跡である土生池遺跡や藤並地区遺跡からナイフ形石器などが発見されています。弥生時代の遺跡としては田殿尾中遺跡の環濠集落が調査され弥生時代中期には拠点的な集落であったことが明らかになっています。古墳時代では県下でも珍しい巨石積みの石室をもつ天満Ⅰ号墳(泣沢女の古墳)が調査され、復元整備されています。

また、古代の須恵器を焼成した窯跡も多く土生池窯跡などが調査されています。中世では野田地区遺跡で護岸を伴う溝、天満Ⅰ遺跡で和鏡や刀子を副葬した土坑墓が見つかっています。このように周辺部は原始・古代より有田地方の中心的な地域であったと言えるでしょう。

#### 発掘調査

周知の遺跡である旧吉備中学校校庭遺跡の範囲内とその東側に下水処理施設が建設されることになり、開発予定地の約二〇〇〇㎡を対象に遺跡の内容確認調査が吉備町教育委員会によっておこなわれました。その結果、全域に弥生時代以降の遺構が展開していることが明らかになり、今年度は、そのうちの二九三六㎡を対象に当センターが発掘調査しました。

#### — 第19号の主な内容 —

1. 旧吉備中学校校庭遺跡  
発掘調査の概要
2. 吉備町小学校総合学習  
～肌で感じる地域の歴史～



調査区全景 (北から)

検出した遺構には弥生時代後期中頃(約一九〇〇年前)から後期末頃(約一八〇〇年前)にかけての堅穴住居7棟(住居1〜7)・溝状遺構4条(溝1〜4)・土器棺墓1基、古代と考えられる掘立柱建物8棟(

建物1～8)・竪穴遺構1基(土坑1)・土坑・溝のほか中世の掘立柱建物2棟(建物9・10)・土坑・溝(溝6～8)などがあります。

弥生時代後期中頃から後半にかけての竪穴住居は円形で調査区の中ほどに集中しています。これらのうち住居3は平面プランが直径約9.6m×9.1mあり、集落では最も大きな住居です。各住居は壁際に溝を巡らしており、中央には炉を備えています。住居4と住居6は拡張を伴う建て替えを行っており、住居3も支柱の位置や数から建て替えが考えられます。住居2は炉の周囲に一段高い堤を築いていました。上屋を支える柱は規模が小さいもので4本、大きいもので10本程度あることが分りました。

遺物は各住居から土器が出土しており、住居1からは土器が廃棄された状態で多量に出土しています。住居2の床面には作業用の台石が残されていました。このほか、特記する遺物として住居3から管玉が2個出土しています。

弥生時代後期末頃の住居7は円形

住居5と同じ位置に築かれており、平面プランは方形です。壁際にはベツド状遺構と言う一段高い空間を備えており、遺物は土器類のほか鉄製品が出土しています。

土器棺墓は、住居7の床面で検出しました。住居の南東隅の柱位置に柱を抜取った後、60cm×60cm、深さ約30cmの土坑を掘削し、その中に鉢で蓋をした甕(かめ)を横たえていました。土坑の上には標石と考えられる大きな石が2個据えられています。

した。石には朱の痕跡が見られましたが、これは住居で使っていた朱を磨り潰した石を転用したものであると考えられます。

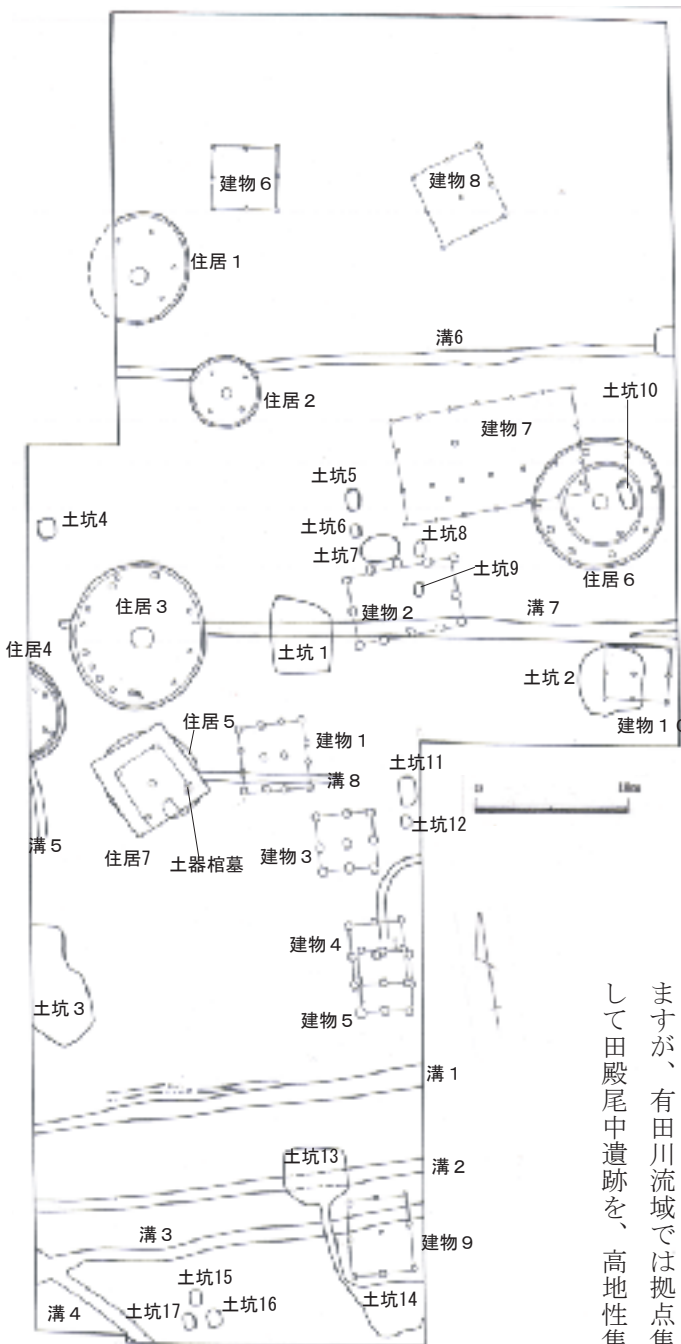
溝1～3は幅0.8～1.0m、深さ30～50cmで、3mと5mの間隔を空けて伸びており、確認調査の結果100m以上東まで続いていることが明らかになっていきます。

古代と考えられる掘立柱建物のうち、建物1～5は柱を据えるあなが長さ・幅50～70cmと大きく、柱は痕

跡から直径20cm程度あります。また、正方形プランで総柱の建物3～5は倉庫の可能性が考えられます。建物6～8は柱を据える掘形が直径30cm前後の円形です。遺物から建物1～5より新しい時期が考えられます。

### まとめ

弥生時代前期あるいは中期に各河川の平野部に成立・展開した拠点集落は、中期の終わり頃から後期前半にかけて集落を丘陵や山の上に移します。これらを高地性集落と呼びますが、有田川流域では拠点集落として田殿尾中遺跡を、高地性集落と



主要遺構全体図

して星尾山遺跡などをあげることができません。田殿尾中遺跡では中期末に途絶えた集落が後期末に再開し、また平野部にある野田地区遺跡も同じ頃から活動を始めます。これまでの調査などからは後期中頃から後期の後半の集落の実態をうかがう資料がありませんでした。今回の調査で、ちようどその空白期を埋める集落が発見されたこととなります。ところで、中期以前の平野部の集落や高地性集落では堅果類を砕いたりする叩（たたき）石や凹（くぼみ）石などの敲（こう）打器やサヌカイト製石器などが出土しますが、今回の集落ではサヌカイトが一片も出土せず、敲打器などもほとんど出土しません。このことから集落を平野部に移した段階で、道具類も石器から鉄器に移行したと考えることができます。調査区の南で検出した3条の溝は東側にやや弧状を描いて伸びていることが分っています。集落に接していることや溝の南側ではこれまでに弥生時代の遺構や遺物が確認されていないことから、環濠あるいは集落を

区画する溝であった可能性が考えられます。今回の調査で弥生時代後期中頃から後期末頃にかけての集落を新発見した訳ですが、今後周辺部も大規模に発掘される予定です。もし、集落とともに水田や墓域なども発見されることがあれば弥生時代後期の生活を復元できる資料になるでしょう。出土土器を検討すれば集落の消長が明確になり、周辺遺跡と対比をおこなえば集落の動向や繋がりを把握できます。そうなれば、いまだ決定的な答えを見出せない高地性集落の性格にも迫れる可能性があります。



土器棺墓

本年度十一月中旬、旧吉備中学校校庭遺跡の発掘調査現場において、吉備町（現有田川町）内の小学校三年の六年生を対象とした総合学習を実施した。学習内容は、最初に教育委員会の川口さんが資料と遺物（土器・石器）で有田川水系の遺跡動向の紹介をおこない、次に調査現場で当センターが調査の方法と現場説明をおこなった。

事務所前では町内の遺跡を通して

## 吉備町小学校総合学習 ～肌で感じる地域の歴史～

調査現場において

- ☆ 藤並小学校
- ☆ 田殿小学校
- ☆ 御霊小学校

地元の歴史を学び、また出土した土器や石器を実際に触って感触を確かめていた。子供たちからは土器の重さや質感について思い思いの感想が飛び出していた。中でも泣沢女の古墳（天満1号墳）から出土した金環（イヤリング）に触れたときの感動はすごいもので皆口々に「すごい」を連発していた。普段、博物館などでガラス越しにしか見られないものが、今は自分の手中にあるという感動と驚きであろう。

調査現場では発掘中の様子を実際に見てもらい、調査の手順を説明してきた遺構、特に堅穴住居について詳細に説明した。

子供たちが一番不思議に思っているのは、どうしてこの場所に住居跡や溝跡があったことが分かるのかということであった。この疑問は遺跡見学に訪れた小学生だけでなく一般の人たちの多くが思っていることだと感じています。一旦、人間の手で掘り返された土は意図的に埋め戻したり、自然に埋没しても、その箇所周辺とは色や質感が違うものとな

